

自閉症児の早期からの社会自立に向けた教育支援体制について

－ IEP と指導の実際から －

ローリー・エッケンルード

(米国ノースカロライナ州ウェイク郡立ワシントン小学校教諭)

皆さん、こんにちは。まず、皆さんに特別な感謝を申し上げたいと思います。この国立特殊教育総合研究所のお招きをいただきまして、学校の教師として皆さんに話をできること、そのことに感謝申し上げたいと思います。

きょうは既にいろいろな話題について話がありました。ということで、たくさん話題がありましたので、ここでは特に絞って二つのこととお話ししたいと思います。まず一つ目が、IEP、個別教育プログラムに関してです。それから、私どもの教室で使っております構造化された教授法、ストラクチャード・ティーチングについて申し上げます。

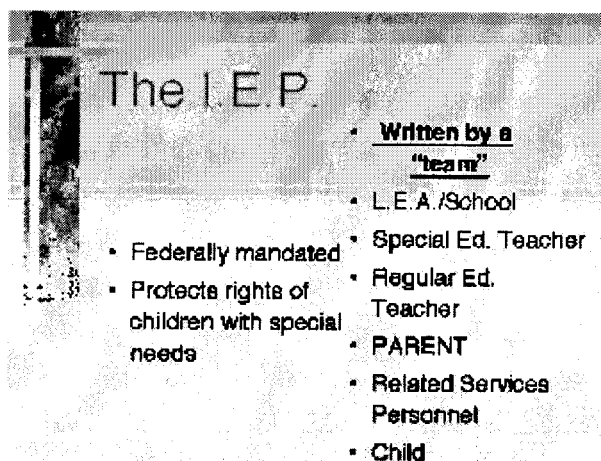
IEP について

<IEP とは>

まず、IEPの方から先に話を始めたいと思います。皆さんのお手元の資料の方に二つIEPがあります(参考資料2)。より高度に機能している高機能自閉症児に向けてと、それから低機能自閉症児に向けてと、それぞれ一つずつあるんですが、きょうの私の話の中ではそのIEPの中身については特に触れません。これは皆さんの時間のあるときにでも読んでいただければと思います。

アメリカではおよそ20年ほど前からこのIEPが使われるようになっていきます。すなわち、これは特殊なニーズを持った、そういった子どもたちの権利を守っていかうという意図から生まれた法律によって必要になってきたわけです。これは教師一人が書くのではなくて、チームがこのIEPを書くわけです。すなわち複数の人間がIEPを

書くわけです。そして、IEPのチームとして、その当の子どもに対する特殊教育のニーズは何であるか、それを特定していく責任があるわけです。



個別教育プログラム(IEP)

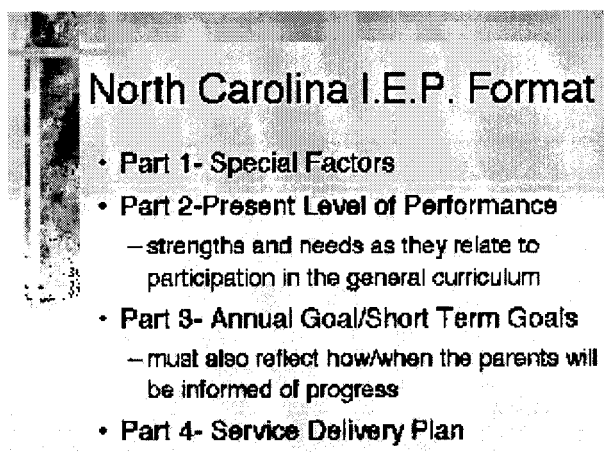
- 連邦法で定められている
- 特別なニーズのある子どもの権利を守るもの
- 教育委員会/学校の代表者
- 特殊教育の教師
- 通常の教育の教師
- 保護者
- 関連したサービス提供者
- 子ども本人

法律上、IEPのチームにはこれから申し上げる以下の人たちが入っていなければなりません。すなわち、地域の教育委員会、そして学校監督関係の機関の代表者。この人がその子どもにとって使える資源は、すなわちどういうリソースを使えるのかということを知っていなければなりません。また、そのチームの中に特殊教育の教師、それから普通教育の教師を含みます。法律上、その子どもが、児童が普通教育の教室に参加している、あるいは参加するかもしれない場合には普通教育の先生を含めなければいけないとなっています。チームの中に普通教育の教師が入っていないということは、その自己完結型の環境から普通教育の方

には決して移ることがないということを家族に対して示してしまいかねないわけですから。また、親あるいはその子どもの法律上の保護者が含まれなければなりません。さらに、ほかの児童生徒等と一緒にあって取り組む人たち、言語療法士、あるいは理学療法士、PTなどを含みます。また、児童本人、例えば14歳で始めるということで可能であれば、その子どもにも参加してもらおうと。

＜ノースカロライナ州の IEP フォーマット＞

ノースカロライナ州の IEP における形態、フォーマットですが、そのうちの第一部としてまず始まるのがスペシャルファクター、すなわち特別な要因というものから始まります。例えば、視覚障害の場合に点字が必要であるかどうかというような検討や、聴覚障害である場合にそのための手話通訳が必要であるかどうか。あるいは行動上の



North Carolina I.E.P. Format

- **Part 1- Special Factors**
- **Part 2- Present Level of Performance**
— strengths and needs as they relate to participation in the general curriculum
- **Part 3- Annual Goal/Short Term Goals**
— must also reflect how/when the parents will be informed of progress
- **Part 4- Service Delivery Plan**

ノースカロライナ IEPフォーマット

- ・第一部 — 特別な要因
- ・第2部 — 現在達成している水準
 - 一般のカリキュラムに参加することに関連するその児童の強み、および特別な支援のニーズ
- ・第3部 — 年間目標/短期目標
 - 子どもの進歩について何時、どのように保護者に報されるかが示されていないといけない
- ・第4部 — サービスの提供計画

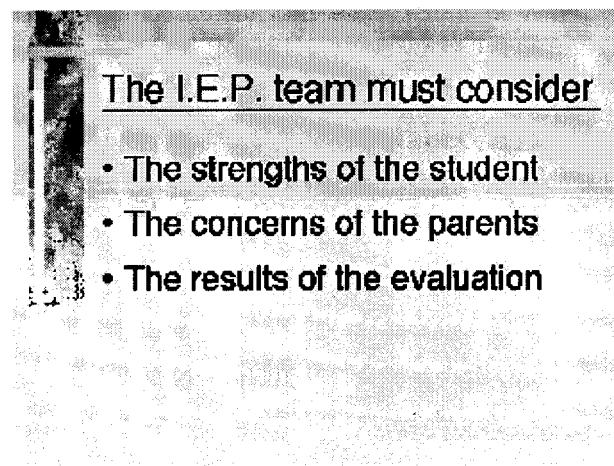
大きな問題がある場合に行動計画が必要であるかどうか。そういったことを保護者と一緒になって多くの時間をかけて話し合います。このページを作成する作業が、みんなの意見を一致させることができて終了したら、IEPの作成における次の

段階にとりかかるわけです。

次の段階、すなわち第2部は、その児童が現在達成している水準という部分です。これは一般のカリキュラムに参加することに関連したその児童の強み、および特別な支援のニーズのことです。

第3部は年間目標及び短期目標です。年間目標というのは、比較的大きな目標として年間でどこに到達したいかをまとめたものです。短期目標というのは、より個別のそれぞれの児童が短期的に到達できそうな目標ということになります。このページに子どもをどのように進歩させていきたいか、子どもにどのように育ってほしいかということを書くわけです。そして、それはデータの場合もありますし、あるいはビデオを使う場合もあります。またワークサンプルを使う場合もあります。さらには教師のメモを使う場合もあります。また、この同じページにですね、親に対してどうやって、どういう形で、そしてどれぐらいの頻度でその子どもの進捗状況を伝えるかということも書きます。IEPの一番最後の部分となるのが、このサービスの提供計画です。これは、その児童がその特殊教育の教室でどれだけの期間サービスを受けるかや、通常の学級の方ではどれだけの時間授業を受けるのか、あるいは何か特別なセラピーを受けているのであれば、そのセラピーは例えば1週間にどれだけの時間受けているのか、こういったことを書きます。

＜IEP チームが考慮すべきこと＞



The I.E.P. team must consider

- **The strengths of the student**
- **The concerns of the parents**
- **The results of the evaluation**

IEPチームが考慮すべきこと

- ・その子どもの強み
- ・保護者の心配
- ・評価結果

IEPチームとして考慮しなければならないことは、やはりその子どもの強いところで、これを十分に考えに入れる必要があります。また親の心配していることがらについても考えていきます。そして、その子どもに対して行われた評価があれば、その結果を考慮するわけです。

<IEPに含まれる分野>

IEPを作成していく際に含める分野としては、以下のようなものがあります。

Areas to include in an I.E.P.

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| • Communication | • Self-help |
| • Functional Academics | • Independent Living |
| • Social/Emotional Behavior | • Fine Motor Skills |
| • Work Behavior | • Gross Motor Skills |
| • Independence | • Transition-begins at age 14 |
| | • Related Service Goals |

IEPに含まれる分野

- | | |
|------------|----------------|
| ・コミュニケーション | ・自助 |
| ・機能的な教科学習 | ・自立した生活 |
| ・社会的／情動的行動 | ・微細運動のスキル |
| ・学習態度 | ・粗大運動のスキル |
| ・自立性 | ・移行 - 14歳より始まる |
| | ・関連サービスの目標 |

まず、コミュニケーションについて、それから機能的な教科学習について、社会的及び情動的な行動、学習態度、学習や作業における自立性、そして自分で自分を助けられる自助のスキルですね。また自立した生活、微細運動のスキル、粗大運動のスキルがあり、そして移行があります。これは教育上の目標から今度は職業関連の、仕事関連の目標に移るものです。先ほどショブラー博士も言

われましたように、大体14歳ぐらいから始まるんですが、その移行期があります。また、子どもがセラピーを受けている場合には、そのセラピー上の目標も書かなければなりません。

<目標を書く際に>

また、IEPによりまして、各それぞれの児童の子どもの個別のニーズに基づいたスキルの獲得を継続していく必要があります。それを確立させるのがIEPです。それはその子どもと一緒に取り組んでいく際にスタッフにとっての指針となるものです。

Write each goal to ensure:

- individual needs
- continuum of goals
- relates to assessment
- goal is functional
- relates to long-range goals
- goal is measurable

目標は以下のことを確認して書く

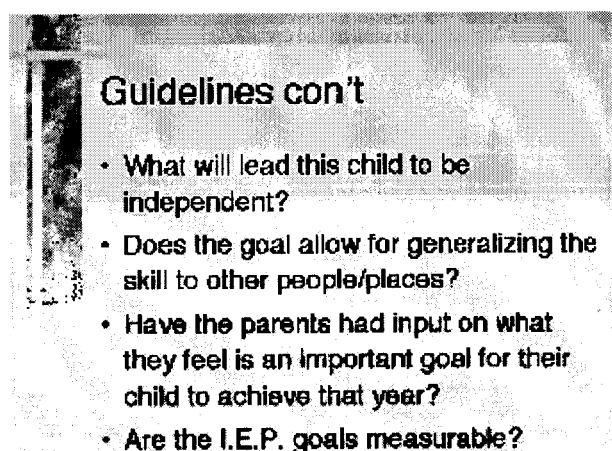
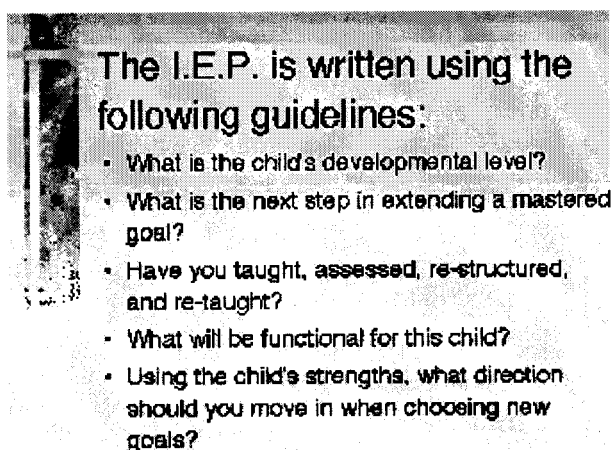
- ・個別のニーズ
- ・目標の継続性
- ・評価と関連すること
- ・目標が機能的であること
- ・長期目標と関連していること
- ・目標が適度であること

そこで、そのための目標というものを明記しておくことが重要になります。評価も大切で、TEACCHの学級において行われることのかかなりの部分が、評価をすること、何回も何回も再評価をするということです。その評価に関連があるように目標が設定される必要があります。また、チームとしてIEPの目標が機能性にかかわるもの、そして長期の目標に関連があるということを確実にすることが必要です。さらに、目標がその子どもにとって適度なものでなければなりません。

そして、教室として正確な記録を残しておく、記録を保持しておくシステムが必要です。IEPは学校に対してその責任を担っていくもの、すなわちそれがその責任を明示する、そういうものになります。

＜IEP 作成のガイドライン＞

IEPは以下のガイドラインを使って使われます。



まず、その児童の、その子どもの発達レベルはどれぐらいなのかということ。そして、到達した目標をさらに高めていくための次のステップは何かということ。スキルを教えたか、それをテストしてみたか、評価してみたか、さらに再び構造化してもう一回教えたかどうか。この子どもにとって現実的にうまくいく、機能的なものとはどういうものなのか。その児童の長所を生かして次の目標を選んでいく際にどういう方向性に向かわ

IEPは以下のガイドラインを使って書かれる

- 子どもの発達水準はどの程度か？
- 目標が達成され、さらに目標を高めるに際して次のステップは何か？
- あなたは教え、評価し、構造化し直し、そしてもう一度教えたか？
- その子どもにとって機能的なことは何か？
- その子どもの長所を生かして次の目標を選 ぶ際に、あなたはどのような方向性に向かわ せていくのか？
- その子どもは何によって自立できるようになるのか？
- その目標はスキルを他の人々や状況に汎化するのか？
- 年間の重点目標に、親の感じている目標が入っているかどうか？
- IEPの目標は妥当なものか？

せていくべきか。何によってこの子どもがひとり立ちすることができるのか。また、その目標によって汎化を可能にしていくのか。その年にその子どもが到達してもらいたいという重要な目標、それを感じている親の方からの意見が入っているかどうか。そして一番最後の点ですが、その目標自体が妥当なものかどうかということです。

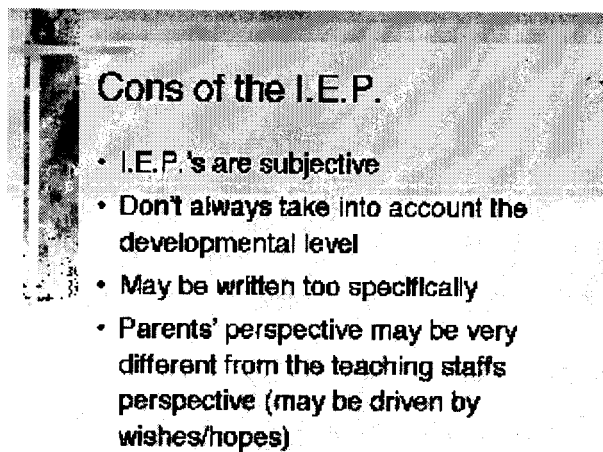
＜子どもの移動に際しての有用性＞

その児童が、ある学級もしくは教師からほかの学級もしくは教師へ移ってくるに際して、あるいは移動していく際に、このIEPが次に教える側の教師にとっても非常に役に立ちます。すなわち、こういった次のスキルレベルにその子どもが進んでいく必要があるのかということを教師の方で知るために役立ちます。また、特定のその子どもに対して、それは個別化されています。したがって、二つのIEPが全く同じであるということはありません。また、定期的にIEP自体を更新していくということが重要です。これによって新しくついた先生も、どういうことを教えるべきかについて多くのことを知ることができます。すなわち、その子どもは何に取り組んでいるのかということ、その子どもが今までにどれだけそれに成功しているかということ、その子どもの長所やニーズは何であるのか、前の学級でその子どもは何を達成することができたのか、その際にどうい

う手法が用いられたのか—例えば構造化された教育法が使われたのか—について知ることができます。

<IEP の欠点>

IEPの欠点についてもふれておきましょう。



IEPの欠点

- ・IEPは主観的なものである
- ・常に発達水準が考慮されるとはかぎらない
- ・過度に特定して書かれすぎることがある
- ・保護者の見方と教育スタッフの見方が非常に異なることがある（たぶん保護者の希望／期待によって）

まずIEPというのは主観的なものです。チームにおいて時として十分に子どもを理解していない場合や、その子どもの自閉症についての理解が十分でないままに不適切なIEPを計画してしまう場合があります。また、そのような誤ったプログラムでは、その子どもの発達水準を十分に考慮せずに、実年齢に基づいて目標が書かれてしまうことがあります。場合によっては、教師がある特定の言葉を使わなければならない状況に陥ってしまうような、あまりに具体的に特定して書き過ぎることもあります。また、教える側の教育スタッフの見方と親の見方というものが非常に異なってしまう場合があります。これは、その障害を親が十分に受け入れていないような場合、特に幼少期の子どもに対して、そういうことがよくみられるこ

とがあります。それは親の希望とか、こうあればいいなという望みによって引き起こされるのかもしれない。

<最後に>

IEPに関して、最後もう一つ事実を申し上げます。

IEPは1年間に到るまでの期間を想定して書かれます。そしてその期間、子どもが発達的に適切な教育を確実に受けられるようにチーム内で合意が得られるよう最大限の努力がなされなければなりません。もし、チームとして合意ができない場合には、学校は親に必要な情報を提供してその解決を図らなければなりません。

指導の実際 —TEACCH モデル—

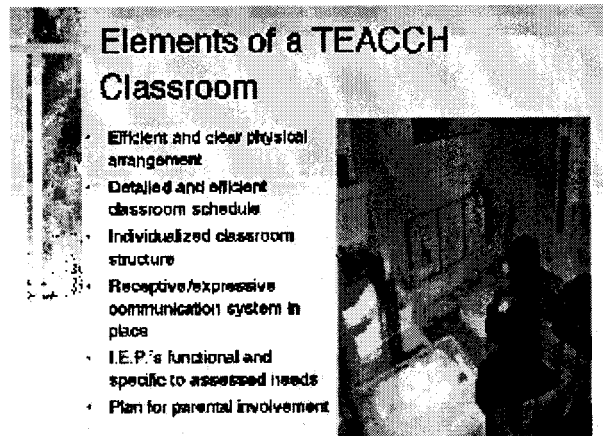
<TEACCH による学級の諸要素>

今度は、もう少し教えることに関しまして、指導の実際に関しまして楽しい部分に話を移しましょう。TEACCH モデルを使って、そして構造化された教育の方法を使うとこの設定という話であります。それでは、TEACCH を用いて教育を行う際のどのような要素があるのかということから入りましょう。

まず、教室の中には家具とかあるいはさまざまな道具がありますけれども、これをはっきりとわかりやすく効率よい形にしっかり配置していくのだということです。そして、詳細にわたった効率的な学級の計画を作っていきます。さらに、教室の構造というものはそれぞれの障害、自閉症児の状況に合わせて個別化していきます。それぞれの子ども用に受け入れやすい、かつ表現力に富んだコミュニケーションの設定も用意します。

IEPというものは、まず子どものニーズをしっかりと評価することから始まり、それに対して非常に機能的な、そしてそれにぴったりと合ったものとならなくてははいけません。さらに、親を巻き込んでいく、参画させるということもその計画の

中に盛り込んでいく必要があります。親をどんなふうに参加させていくのかということにつきましては、明日のパネルディスカッションの方でお話しさせていただきたいと思います。その要素を全部一つ一つお話しする時間があればいいのですが、きょうはそれができません。残念ながらきょうは全部網羅することができません。



TEACCHによる学級の諸要素

- ・物品の効率的でわかりやすい配置
- ・詳細で効率的な学級の予定表
- ・個別化された学級の構造
- ・受け入れやすく表現力に富んだコミュニケーションシステムの設定
- ・IEPは機能的で評価されたニーズに合ったものとする
- ・保護者の参画

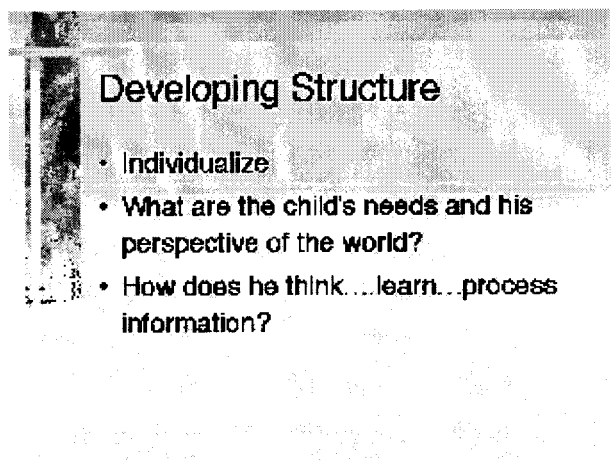
<構造化された教育>

そこで、TEACCH モデルの中で一番重要だと思える部分を選んでお話ししたいと思っています。その TEACCH モデルの中で一番大切なのが構造化された教育法ということです。まず、我々の方で一番大きな、この自閉症児が抱える一番大きな欠点というのは何だろうかということを考えた場合、恐らく理解力の欠如という答えが出てくるのではないのでしょうか。そこで、まず我々がしなくてはいけないのは、こうした環境、この自閉症児を取り巻く環境には意味があるのだということを教えるということになります。つまり、自閉症児に対して単に従順になってもらいたいとはだれも思っていません。そして人生、自分を取り巻く人

生なり生活の中には必ず何らかのパターンがあるんだということをわかってもらいたいと思います。そこで、この TEACCH を行う中で、TEACCH のプログラムの中で、子どもたちはこのパターンに沿って生活するということを覚える。そうすれば将来的には両親とか教師がついていなくてもこのパターンに沿って生活していくことができるんだということです。これがいわゆるストラクチャード・ティーチング、構造化された療育の背景にある大きな柱です。つまり、この構造化という概念こそが TEACCH プログラムの屋台骨であると言ってもいいでしょう。つまり、カリキュラムの一部ということではなく、我々が行うありとあらゆる療育の中の一部に必ずこの構造化という概念が入っているわけです。そしてまた、子どもたちの行動をきちんと管理していく、問題行動等がある場合にも、それを管理する上で一番重要なかぎを握っているのが構造化であると考えています。

<構造化するにあたって>

構造というものは連続線上に構成されていくべきものです。そこで、一人ひとりそれぞれがこのレベルが違ってくるわけですから、そのそれぞれのニーズに合わせて構造化のレベルについても



構造化するにあたって

- ・個別化されること
- ・子どものニーズは何か、子どもの目に映っている世界の理解はどんなものか？
- ・子どもがどのように考え、学び、情報処理しているか？

我々は変えていきます。それから、構造というものを考えていく際に、その子どもはどんなニーズを持っているだろうか、それから、その子どもの目から見て世界はどんなふう映っているだろうかということを考えます。この子どもはどんなふう考えて、どんなふうに学習し、情報をどういうふうに処理しているのだろうかということも考えます。つまり、まず第一に行わなくてはいけないのが子どもの自閉症の理解ということです。その子どもの自閉症はどういう状況なのかということをもまず理解して、その上で我々は構造化を行っていくわけです。そして、その上で我々の療育のための戦略を立てていきます。

<構造化する理由>

ということで、この構造化を行うに当たってはいくつかの理由があるのですが、それを御説明しましょう。

これはまず子ども、その自閉症児が物事を理解するために役に立つのだということ。これは自閉症だけではなく、我々すべてに当てはまることです。周りに見慣れたものがあればいいのですが、周りに見慣れないものばかりに囲まれているとき、我々はみんなある程度興奮します。それと同じように、子どもの場合も自閉症の子どもの場合にはこれが言えるわけです。ですから、このような形で構造化をすることによって、子どもたちを落ち着かせることができます。そしてまた、視覚上の手がかり、この大切なことに関連のある手がかりを見ることができることによって子どもの学習効率も上がります。こうして、子どもが自立を成し遂げていくために、そのための援助を提供するものとして構造化を用いていくことができるということにもなります。さらに、我々としては、行動管理、問題行動を管理していくためにも構造化を使っていくことができるというふうに考えています。

<構造化の4つのレベル>

さて、TEACCH モデルでは四つのレベルの構

造化を行っています。まず物理的な構造化、それからそれぞれの毎日の日程表とか日課表、あるいは時間割が入ります。個々人のスタディーワーク・システム、勉強作業のシステムです。そして、タスクオーガニゼーションということで、作業をわかりやすくすることが入ってきます。

The TEACCH model uses four levels of structure

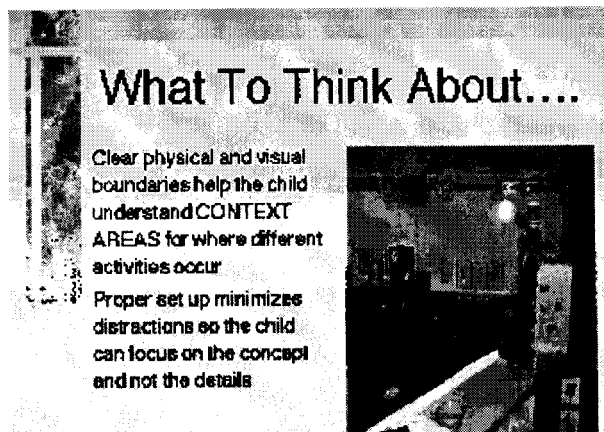
- Physical structure
- Daily schedule or routine
- Individual work system
- Task organization

構造化の4つのレベル

- ・物理的構造化
- ・予定表もしくは慣例の手順
- ・個別のワーク・システム
- ・タスク・オーガニゼーション

<物理的構造化>

それでは、その一つ一つをもう少し細かく見ます。まず第一に、物理的な構造化ということです。物理的構造化は教室を構造化することから始まるのですが、まず自問しなくてはいけないのは、この空間をどうやって使っていこうかなということです。つまり、それぞれの目的に合わせて空間をしっかりと区切っていかなければいけないわけなのですが、その際に、例えば道具とか家具とかそういういったものをどう置いてどんなふうに仕切りをつくっていったらいいだろうか、境界線をつくっていったらいいだろうかということを考える必要があります。というのは、このようにしっかりと明らかにわかるような形で明確な仕切りをつくり、その中に何があるのかということがはっきりわかれば、子どもたちは、その場に行ったら自分



物理的構造化にあたって

- ・明確な物理的で視覚的な区切りによって、それぞれの場所の意味、すなわち異なったことが起きる場所であることを子どもが理解しやすくなる
- ・適切な設定によって、子どもは気が散りにくくなり、細部ではなく全体の概念に集中できる

はこれからこういうことをするんだなということがわかるわけです。そしてまた、きちんと設定することによって、子どもたちが視覚的な、あるいは聴覚的な周りの刺激を受けないようになるということによって、気が散るというようなことも防ぐことができるようになります。

そこで、皆さんも教室をつくっていく際には、必ず空間を見据えて、その中にどんなふうな区切りをつくっていこうかということを考えてください。そしてその上で、空間を区切るための材料を置いていていただきたいと思います。ただし、仕切りをつくられる際には、仕切りの高さに注意する必要があります。常に教師は立ち上がって子どもを全部見わたすことができるように、上から見ることができるぐらいの高さにしていただきたいと思います。そして、基本的な教育エリア、ティーチングエリアというものをつくっていきます。

この教育エリアというものがいくつかに分かれますけれども、まず一つにおやつ場所、それから遊びの場所、特に小さい子の場合には遊びの場所、プレイエリアが必要になってきます。そして

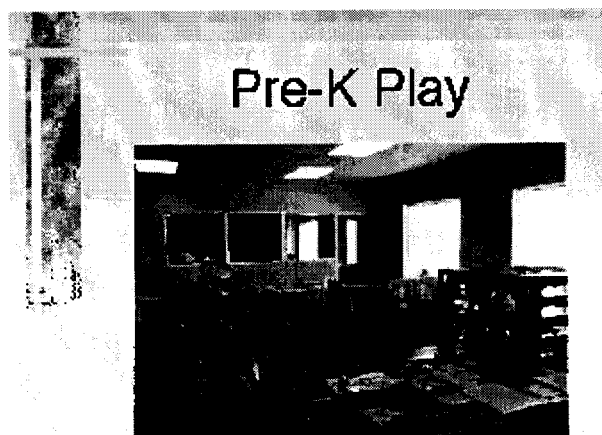
もう一つ、特に小さい幼少の子にとってみますと、グロースモデルのプレイエリアが必要になってきます。それからまた作業をするところ、

あるいはハウスキーピングということで、さまざまな物を置いてある場所というものも必要になります。それから、オープンチャイスプレイ、いろいろなもので遊ぶことができる場所です。



操作用／家事用の場所

こちらの場合は、就学前の子どもたちが入る部屋なんですけど、ごらんのようにプレイエリアが就学後の子どもたちに比べて広がっています。こちらでは、遊び場所の方のすぐそばに窓がありま



就学前の子どもたちの部屋

す。ということは、学習をする側のそばには窓がないということで、学習をするときにはなるべく

気が散らないように、気持ちが散漫にならないようにということを考えるわけです。

それから、こちらがグループエリアと呼ばれる場所で、グループで子どもたちが会う場所、ということは朝の一番最初の段階でみんなで集まるときには、ここに集まるわけです。



グループ・エリア

ごらんのようにいろいろな家具ですとか什器ですとかそういったものを置いてありますけれども、そういった家具などによって場所がきっちりと区切られているのだということにお気づきでしょうか。

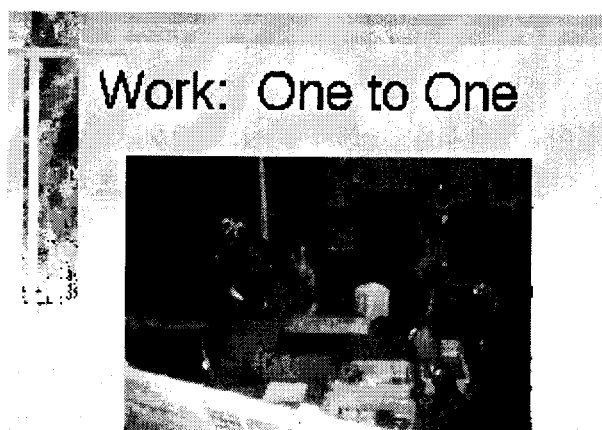
それから、トランジションエリアと言いまして中継地というのにも必要になってきます。つまりこれはいわば中立地帯となるわけです。子どもたちは一つの場所からほかの場所へ移動する際にこのトランジションエリア、中継地に寄ってから移動することができるわけです。ここが新しい情報を受け取る場所でもあります。つまり、この中継地をたどって別のところに行くことによって、子どもたちは連続性を体感することができるのです。こちらで今お見せしているものが、このトランジションエリアのあり方だというふうには考えていたきたくはありません。こんな形ではなくて、もっと違う方法で中継地点というものをつくる場合もあります。



中継地としての机

こちらは、子どもの机のところにスケジュールが置いてあるというのを示しています。この子の場合には中継地ではなく、新しい情報が必要になってきますと自分の机に帰ってきます。この自分の机の前に自分のその日の時間割が書いてあるわけです。それからまた、自分で時間割を持ち歩いている子どももいます。例えば、通常クラスに行っている子どもの場合には、特に自分で時間割を持ち歩くということが非常に重要になってきます。

それから、1対1の作業エリアというものもつくります。この部分で新しい技能を教えていきます。

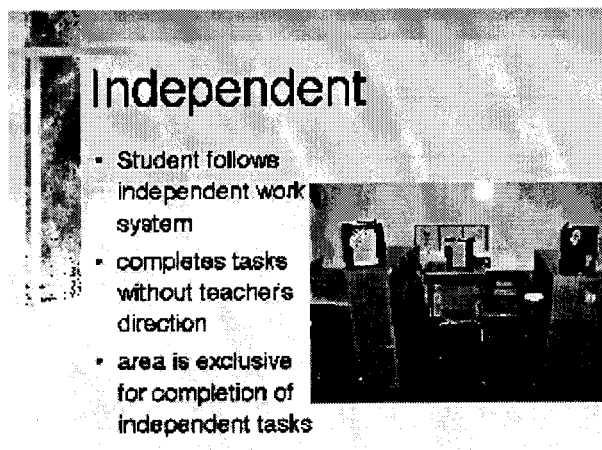


1対1の学習の場

こちらで1対1のエリアをごらんいただいてい

ます。こちらでは、ちょうど自閉症児のすぐ前に、正面に教師がいるのがわかります。ただし、必ずしも正面でなくてはいけないということではありません。特に重篤な症状を持っている自閉症児の場合には、正面ではなくて横の側に座ってもらわなくてはいけないというような生徒もいます。

それからまた、独自のそれぞれの個別の「自立的」(インディペンデント)と呼ばれますワークエリアもあります。



自立エリア

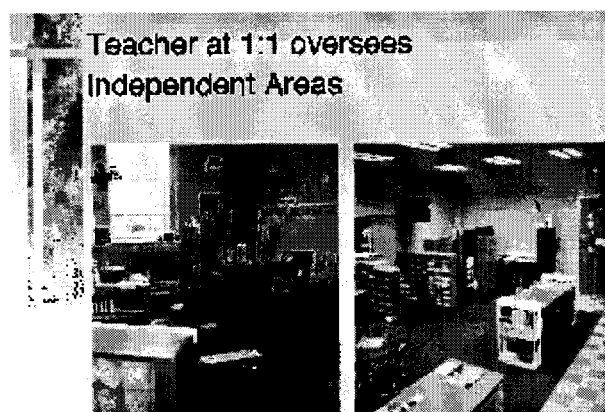
- ・生徒は自立した学習のシステムに従う
- ・課題を教師の指示なしで達成する
- ・このエリアは自立的に課題を達成するためのみある

そして、この自分のワークエリアというものができるわけなんですけれども、その際にその中でどのようなことをしてもらいたいのか、ということについても十分にわかるようにしなくてはいけません。子どもたちが気が散ることのないように、そういった気が散るような要因についても十分に管理する必要があります。このエリアについて、このそれぞれの自閉症児のための個々のスペースについては、それほど大きな空間をとる必要はありません。個々人のそれぞれの自立的なワークスペースということになりますので、その場合にはそれぞれが自分の学習を自分一人で行うということになります。つまり、先生から指示されなくと

も自分一人でこれをすべて行わなくてはいけないわけです。つまり、この自立のための学習、自立のためのさまざまな課題をこの中で学んでいこうということで、このような個々人のためのワークエリアがつくられています。

これももう一つですね、この自立のためのワークスペース。ごらんのように、物理的にどんな構造になっているのかということはおわかりいただけたと思います。こちらの部分で、この子どもが従わなくてはいけないルールというのが目の前に張ってあります。これだけしかルールの規定がありません。

こちらの方はもっと年長の子どもになりますけれども、個々にそれぞれの一人ひとりの自立のためのワークエリアですが、このように大きい子どもの場合には部屋が少し大きくなっています。

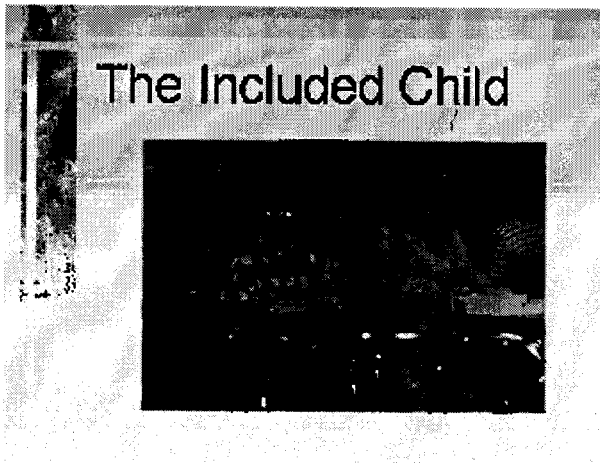


1 : 1 のエリアにいる教師が
インディペンデントのエリア
を見渡せるようになっている

また、先生は1対1のエリアでもって作業を進めながら、その一方で自立エリアの方で作業をしている子どもも同時に監督することができるようになっています。

さて、統合教育を受けている子ども、統合教育を受けてほかの通常のクラスとして勉強している子どもについても同じことが言えます。もちろん、

それほどはっきりした形で構造化はできるわけはありませんけれども、何らかの形で構造化を行っていく必要があります。



インクルードされた（通常の
学級における）子ども

例えばこの子ども、この机の一番端に座っています。先生の机から一番近いところです。そして、たくさんの子どもたちが彼の後ろに座るといことになるわけです。このように、教室の中をさまざまに設定していくということを考える際には、必ず個々の自閉症児が、どんなニーズを持っているだろうかということを十分に考えた上で行っていただきたいと思います。そこで、例えば人の動く動線ですとか、ドアとか窓とか、そういった子どもの気が散るような要素については十分に気を使っていたきたいと思います。

<予定表（スケジュール）>

さて、次に今度は時間割、予定表ということについてお話をします。これもやはり一日を通じて子どもたちを教えることができるもう一つのテクニックです。そして、この予定表ですけれども、この予定表の中に柔軟性を組み込んでいきます。ここで予定ということが重要になってきますけれども、予定をつくることによって、この中でこの子どもたちがそれぞれの出来事の順番を予測することができるようにということで、その戦略を立

てるために必要になってくるのが予定です。このように決まりがある、予測可能であるということによって、子どもたちは興奮することがだんだん減ってきます。子どもたちが落ち着いているということは非常に重要であり、それを助けるためにも、やはりさまざまな分野において予測可能な状況をつくってあげること、そして一貫性を持つということが非常に重要であると思います。

それと同時に、子どもたちには変化を受け入れるということも教える必要はないけません。実際に子どもたちが生活する生活の中というのは、必ずしも予測可能なものに満ちているわけではありません。そして、実際には子どもたちはもっともっと柔軟にならなくてはならないということで、私たちが使っているのは、ファースト・ゼン・アプローチというのですが、初めは何、次はこれという形のアプローチをとるようにしています。そして、このような形の視覚的なツールを使って子どもたちが一日のうちにどういうことを予測しなくてはいいのかということを考えさせます。先生の方で予定表をつくらないと、子どもの方で勝手に自分の予定表をつくってしまいます。そして、日々の予定を決めるのではなく、子どもの方で何度も何度も予定表を見に来るようになります。そして予定表はいつでも変えられます。

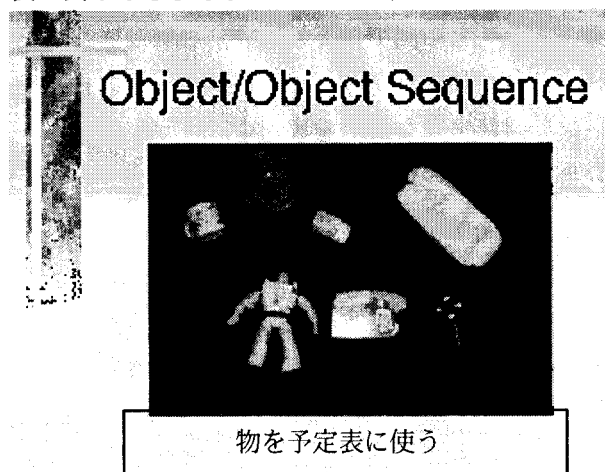
それからまた、予定表、日程表なり時間割を使うということは、もう一ついい役割があります。例えばほかの人との間で人と人とのつき合いをする、人と人との間でコミュニケーションをするということが苦手な子どもにとっても日程表、時間割は非常に大きな役割を果たすことができます。つまり、人とのつき合いが苦手なわけですから、大人に「あなた、次はこれやるのよ」と言われるのは嫌なわけなんですけれども、実際にはスケジュール表を渡すことによって、大人に言われるのではなくて、スケジュール表に言ってもらえることができるわけです。

そこで、それぞれの日の予定表を渡すわけす

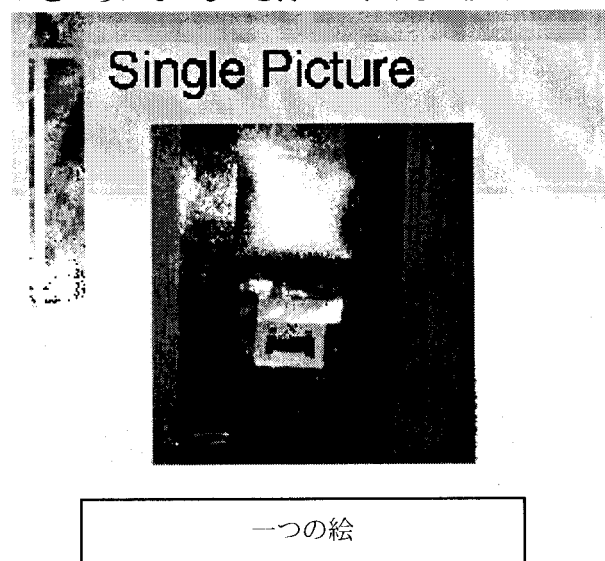
が、その予定表を持つことによって、子どもたちはきょう自分が何をするのか、それも、どのような順番であるのかということがわかるようになります。そして、この予定表を通じて子どもたちに対しものごとの概念というものを教えることができるようになります。つまり、ものごとにはまず始まりがあり、そして最後に終わりがあるのだということ。そして、おのこのの間にはそれぞれ違いがあるのだということ。

自閉症の子どもたちにとって変化を受け入れるということを非常に難しいことです。しかし、予定表をつくることによって、変化が起こったとしてもそれを予測することはできるようになります。このように、変化というものがただ単にランダムに無作為に起こるのではなく、この変化というものが計画上に出てくるような変化というふうにとらえることができるようになってくるわけです。つまり、この子どもたちに対して柔軟性を教えるために使うのが予定表だということになります。このような、はっきりとした具体的な参照要因として使うことができるようなものとして予定表をお使いいただきたいということです。

予定表のつくり方ですけれども、上から下へと見ていく方法でもいいですし、あるいは左から右へという流れでも結構です。そして、それぞれの子どもたちが、それぞれのやり方なりでこの予定表を見ていくことができようになります。予定表の異なるさまざまなタイプを申し上げます。



これは物を予定表に使う場合を示しています。例えばおもちゃがある場合には、それはプレイエリアに遊びに行くということを示しています。そして、お碗がある場合には、これは食事エリアに行くということ。あるいはおむつがある場合にはトイレに行くということ。というような形ですね。そして、子どもに移行してもらいたいときにそのものを子どもに手渡す。そして、行ってもらいたいところにそのものを持って子どもが移動します。



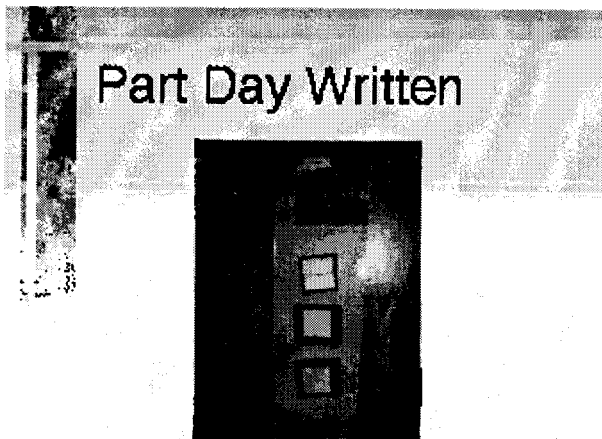
これは一つの絵であらわす予定表です。これは次に何がくるかということしか理解できない子どもですね。



これは一日のうちの一部を示す予定表です。この児童においては最初の言葉、そしてその次は

何があるということがわかります。そしてまた、視覚的な補助、視覚的に助けるものとしてカラー構造化されています。

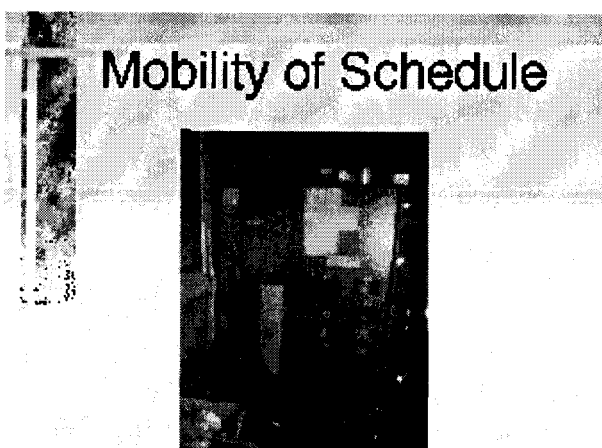
そして、子どもが到着してからその一日何をするかという一日全体の予定表を示すものもあります。読み書きができるようになってきた子どもの場合には、その一日のうちの一部の予定表として、それを書いてあらわす場合もあります。あるいは



書かれた一日のうちの一部の予定表

全日の予定表、一日全体の予定表を書いてあらわす場合もあります。

そして、子どもがそのカードやあるいはそのものを一緒に運んで行けるようにします。ここでは、その子どもが自分の予定表をチェックして、その



予定表の可搬性

予定表のカードを自分で引っ張り出して持って行きますね。

その行くべきところに到達したときに、じゃあそのカードをどこに置くのかということで、このようなところに置きます。

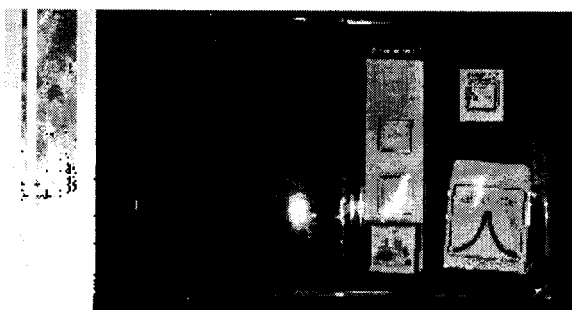


予定表の置き場所

ここでは、その箱にそのカードを入れてるところを示しています。そして、カードを入れて、今度はテーブルの席に着いて作業を始めるわけです。

また、その出来事、イベントをチェックオフする、チェックするものも必要です。すなわち、自分が何を完了したかということを線を引いてチェックするわけですね、完了したということ。

また、実際に地域社会に行く際に、自分で携帯できるようなポータブルな持ち込み可能予定表もあります。こういうふうに携帯式の持っていくことができる予定表の一例です。



携帯型の予定表

重要なこと、覚えておくべきことは、それはやはり常に重要なのは個別化することです。すなわち、その子どもに対してどういう視覚的なヒントが必要か、物なのか、写真なのか、絵なのか、言葉なのかということですね。あるいは予定表の長さはどれくらいなのか。次は何であるのか。ファースト・ゼン、それから一日のうちの一部あるいは全日なのか。で、また、予定表の移動性、携帯性はどうであるか。実際その予定表を、例えばそのカードとか物とか絵とか写真とかを運ぶことができることによって、その自分の環境の意味のない細部に執着してしまうことなく、その目標の考え方の方に焦点を当てることができるようになります。

ただ、その予定表によって階層をつくる場合には注意をしてください。すなわち、考え方としては子どもをよりハイレベルに、より高いレベルにすぐに急速に推し進めていこうというのではなく、よりその子どもに自立してもらおうというのが重要な観点です。

親の方でも家庭においてその予定表を使って、その子どもが自分の時間割を組織化する、あるいはより生産性を高めてもらうということが可能です。これはより大きくなった子ども、そして実際に仕事につく場合においても同じことが始まります。

<個別のワーク・システム>

次にお話をしたいのは、個別のワーク・システムです。これを使うのは教師陣、教師ですね。あるいは親、そしてセラピスト、あるいは雇用主です。特定の時期においてその生徒は何をするのかということを生徒にわからせるものです。予定表によって、一旦その子どもがある特定のエリアに行った場合、そして今度はその個別のワーク・システムによって実際に学習・作業に関する情報を受け取り、何をどのようにするかを理解できるわけです。そして、生徒は、常に自立した形でここで学習・作業をします。

ワーク・システムをセットアップする場合には、常にこれから申し上げる四つの点が子どもにわかるようになっているのかを自問自答してください。

When setting up a work system, always ask if it will answer these four questions !

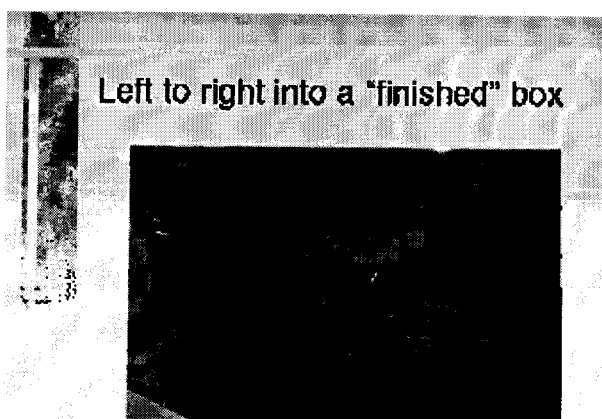
- How much work?
- What work is to be done?
- What will signal the concept of finished?
- What happens when finished?

ワーク・システムをセットアップする際に以下の4点が子どもにわかるようになっているか常に確認すること

- どれだけの学習をするのか
- どういう学習をするのか
- なにが終わりの合図なのか
- 終わったらどうなるのか

その子どもがそのエリアに来たときに、どれだけの学習、どれだけのワークをしなければいけないのということを自分でわかるのかどうか。また、どういう種類のワークをしなければいけないかということもわかるのかどうか。あるいは、終わったということはどういうことによってわかるのかということ。そして、実際に終わった後に、それではその後どうなるのかということですね。

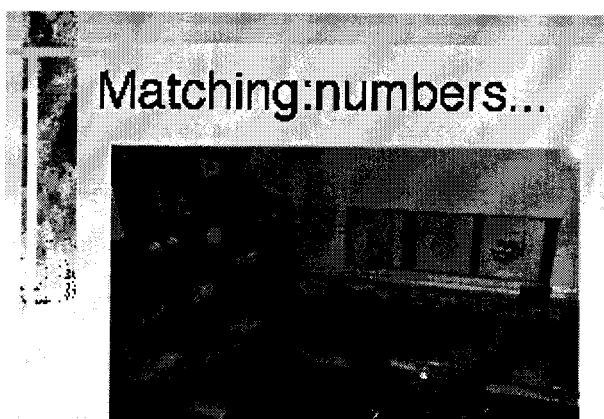
ワーク・システムにもいくつかのタイプがあります。このワーク・システムの場合は、左から右へ動いていくようになっています。すなわち、子どもが左側の引き出しから取って、そして机の上で学習をして、それが終わったときには右の方のかごの中にしまうという形ですね。で、先ほど四つの点に自問自答するべきだと申し上げましたが、このワーク・システムにおいて、その学習をして、そして終わるまで、左の引き出しの中の何をしなければいけないのかということが、その生徒にと



左から右へ、そして
「終わりの箱」へ

ってわかります。その引き出しの中のものすべて
て終わって、もうフィニッシュボックスというか、
最後の右のかごの方に入れることができた場合に
自分は終わったんだと、その学習を終わったのだ
ということがわかりますね。そして、終わったら、
今度は目の前にあるそのパズルで遊んでもいいと
いうことがわかるわけです。

こちらの方のシステムは数字合わせです。カー
ドを取り出して、そしてボックスに入れていきま
す。そして、その学習を行っていき、実際それが
終わったときにまたその棚に戻すわけです。



数字合わせ

このカードがすべて終わったら、カードがなく
なったということで、この学習が終わったという
ことを生徒は知るわけです。そして、この机の上
にあります黒い色をしたカードがプレイカードで
ありまして、すなわちその子は遊びのプレイのエ
リアに行ってよいということが、このカードをも
って終わった後にわかるわけです。あるいは、カ
ラーを、色をマッチさせることもできます。ある
いは絵をマッチさせることもできますね。ここで
非常にいろいろなクリエイティブな形で行うこと
ができるわけです。その場合は、子どもがその絵
をボックスにマッチさせていって、そして学習を
していくものです。こちらのワーク・システムは
実際に書いて示すものですね。

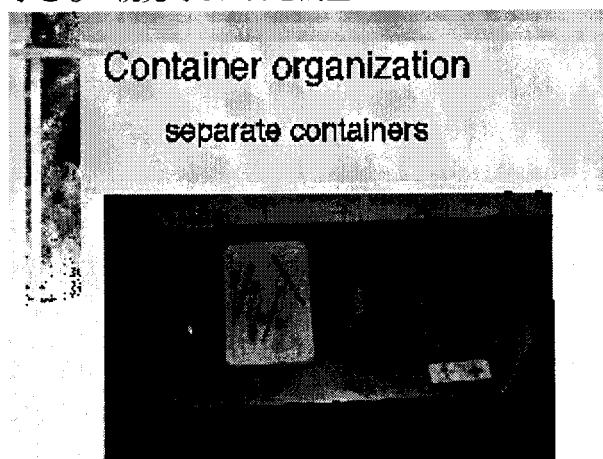
もう一度繰り返しになりますが、個別化を必ず
覚えておいてください。そして、携帯性、移動性
の程度、すなわちその子どもが実際にその学習を
するときに、そのものを実際に手渡す必要がある
のかどうか。あるいは、着席型の形態で左から順
番にやっていく、これは先ほどの写真にそのよう
な例がありましたね。あるいは、教室の中をその
生徒が移動して自分の材料を選ぶ、入手するとい
うこともあります。また、視覚的なヒントによっ
てどれだけの学習か、何の学習かということを知
るということもあります。左側にかごが必要か、
あるいはカードが必要か、あるいは手書きの書か
れたリストが必要かどうか。そして、子どもに終
わったということをどうやって知らせるのか。そ
れはすなわち入れ物が空になったことによって知
るのかどうか。あるいはカードがなくなった、あ
るいはその単語を消していく、消し込んでいくこ
とにそれぞれ示すのか。そして、終わったときに
それではどうなるのかと、子どもにとってどうな
るのかということです。

<視覚的な構造化>

次は、視覚的な構造化についてお話をしましょ
う。生徒に対して教えていく際に、我々は視覚的
な手法を使って彼らの視覚的な能力、適性を有効

活用して、その長所を活用して、そしてまた視覚的な処理の不利な点を最小限に抑えるように努力していきます。場合によっては、口頭で説明をするということはその子どもにとって理解がより難しいし、また意味がないことがあります。その子どもが教える側のまねをしてくれるであろうというに依存せずに、そうではなくて、具体的な何かの物、材料を使って教えていくわけです。

視覚的な構造、構成ですが、まず、その物やスペースを子ども用に組織化すること。こういった視覚的な環境をそのようにオーガナイズすることによって、組織化することによって、その子どもの視覚的な入力を調整しているわけです。



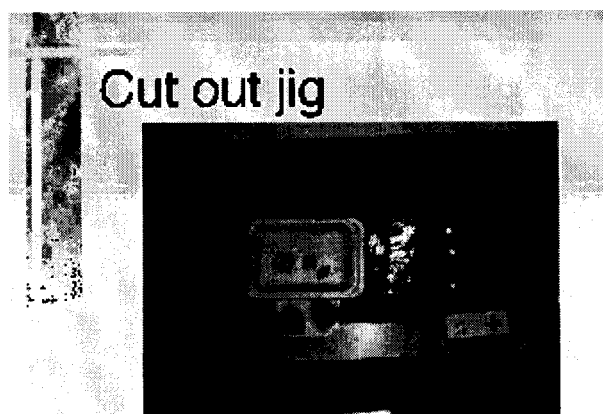
入れ物による組織化

これは入れ物による組織化です。すなわち、別々のものがそれぞれのコンテナ、入れ物に入っています。あるいは筆箱に入れる場合もあります。あるいは統合教育用の子どもに向けてノートブックを使う場合もあります。これらは、その子どもにとって非常に組織化された形で示されます。

また、視覚的に明確に示すものも多く使います。それは重要な情報を示すために特に視覚的にハイライトさせる、強調するわけです。また、関連するイベントを視覚的に明確にします。あるいは、その指示の中で特に具体的な特定の部分を強調します。子どもにとって、その児童にとって当てはまる、そして役に立つ部分を強調するわけです。

そのためには、例えばしばしばカラーコードを使います。ワーク、あるいはその学習に対してハイライトをさせる場合もあります。また、教室全体を通して色コード化によるコード化されたラベルを使います。そして、生徒それぞれが自分の色を持っていて、そしてそれぞれの自分のロッカーとかいすとか棚とか、そういったものに使われるわけです。また、家具、そして物に対してラベルをつけるということが重要です。

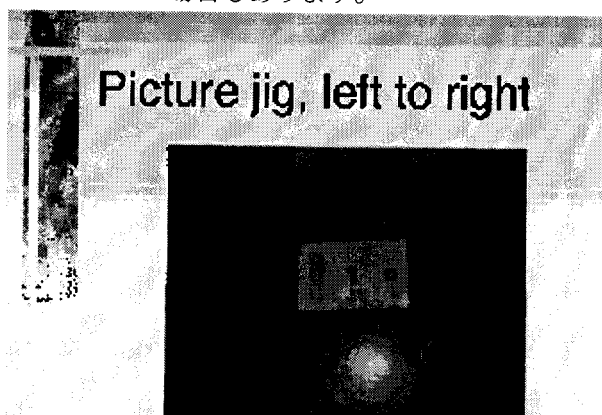
また、視覚的な指示も使います。その作業を完了させるためにどういう順番で行うのかということを生徒に教えるためです。達成したい成果を達成するために、一連の要素を組み合わせることで組織化することが、生徒ができるようにするためのビジュアルリング、視覚的なインストラクションです。また、このビジュアルインストラクション、視覚的なインストラクションを使ってその柔軟性とかあるいは一般化を学んでもらいます。これによってその活動を意味を持たせるわけですね。場合によっては、そのものを実際に置いて作業を提示している、説明しているものもあります。



カットアウトジグ

これがいわゆるカットアウトジグと呼ばれるものですが、これはその部分がカットされており、それを当てはめる型が抜かれており、この抜いてあるところを実際に当てはまる

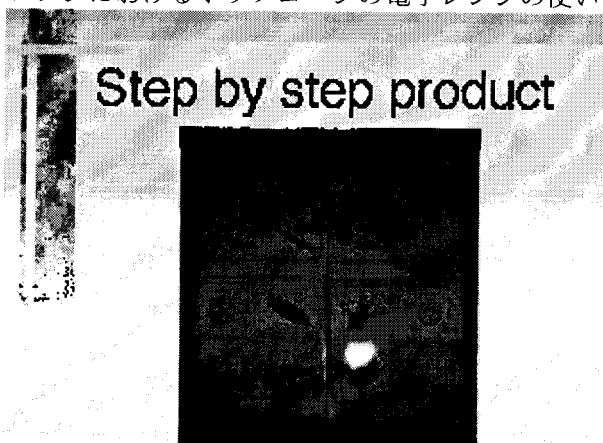
に入れることによって、これをパッケージとしてまとめてよいということが子どもにわかるわけです。また、そのアウトライン、輪郭線に従ってやってもらうアウトラインジグもあります。あるいは、色つけでコード化しており、そして書いた形でその指示が書いてあることもあります。そして書いただけの場合もあります。



絵のジグ（補助具）
左から右へ

これは左から右の順番でその製品を、物を組み立てるという作業をしてもらうもので、絵によるジグがついてます。

これはトイレにおける衛生に係る注意を上から下への形で指示で示してあります。また、電子レンジにおけるホップコーンの電子レンジの使い

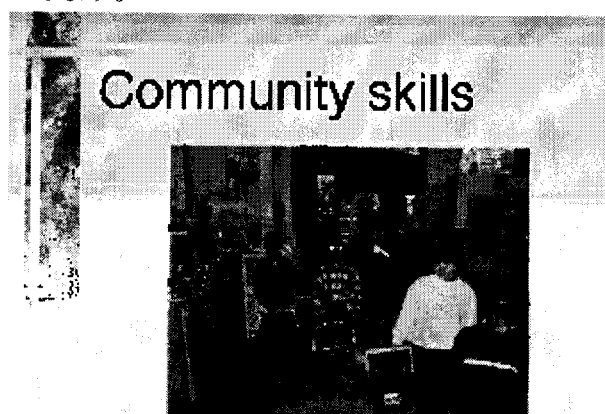


ステップバイステップで制作

方に関して、これもビジュアルインストラクションで示してあります。また、それぞれの異なる指示に対してそのカードを引くという形もあります。

あるいは物をつくるのに、ステップ・バイ・ステップなビジュアルインストラクションに従っていくというものもあります。

このような視覚的な手法を用いた指示の出し方、これは地域社会においても非常に大きな役割を果たします。



地域社会における技能



買い物のリスト

ここでは子どもたちが食料品屋さんに行っています。それぞれの子どものそれぞれのレベルに応じた形で買い物メモを持っています。こ

の子どもの場合には、絵で書いた形のショッピングメモを持っています。そこで、自分のリストを見ながら、そこに合致する物を自分のかごの中に入れるという形でこの課題を終了しています。

それから、我々はいわゆるソーシャルストーリーズというものを書くということも行っています。つまり、これから先、子どもたちが直面するであろうさまざまな事態に子どもたちを準備させるために、こういったソーシャルストーリーを書いていきます。ソーシャルストーリーというのは、社会におけるさまざまな事態においてこんなことが皆さんには期待されているんですよと、そして、こういうことが起こったらこういうことをして、そしてこれが起こったときにはこれが終了の段階を迎えたんですよということを示すストーリーです。



ソーシャルストーリー

そこで、レストランに関するストーリーを書いて子どもたちに読ませた後、今度はレストランに連れて行きます。そこで、11日間にわたって子どもたち準備をしまして、近所に非常に有名な和食のレストランがあるのですけれども、その日本食レストランの方に連れていきました。

では、まとめをさせていただきます。まず、物理的な構造化を行うということ。そして、子どもたちに日程表なり時間割を与えるということによって、子どもたちは周りの環境をよりよく理解することができるようになるということ。ワーク・

システムを用いることによって、子どもたちは原因と結果ということを考えることができるようになる。日課をつくること、そして、さまざまな指示を非常に明確なものにするということ、さらに指示を与える際に視覚的な手がかりを与えることによって子どもたちはこれから何をするのか、何をどんなふうやっていったらいいのかということが十分にわかるようになるということです。このシステムをこのように組み合わせを使っていくことによって、子どもたちはますます自立の度合いを高めていくことができるようになります。

In summary

- The physical structure and schedule help the child to understand the environment
- The work system helps the child to understand cause and effect
- The routine, visual clarity and visual instructions help the student understand what to do and how to do it
- All of these systems help the child to be more independent

まとめ

- 物理的構造化と予定表は子どもが周囲の環境を理解することを支援する
- ワーク・システムは子どもが原因と結果について理解することを支援する
- 定例化、視覚的な明確さ、および視覚的な指示は生徒が何をどのようにしたらよいかを理解することを支援する
- これらのシステムの全ては子どもがより自立することを支援する

我々がさまざまな教育活動を展開していく最終的な目標というのは、その子どもたちが成人となったときに、成人の生活をするに当たって意義ある生活を送ってもらいたいと考えているということに大きな目標があります。つまり、子どもにはいろいろなスキル、技能を教えていくわけなんですけど、ただ技能として持っていればいいということでは教えているのではなく、その技能を用いて実際に機能的に暮らすことができる、実際の将来

の個々人としての生活の中で生かすことができるからこそ教えるのです。例えば、幼少児であった場合であったとしても、その子どもがうんと幼かったとしても、それでもなお非常に基礎的なレベルでなるべく自立することができるようにというような技能を教えるようにしています。そこで、我々は日々の療育の中で非常に具体的なイベント、具体的な出来事に焦点を絞って教えています。

この中で個別化ということ、これが非常に大きな柱となっています。この TEACCH プログラムにおきましては、教師はそれぞれの生徒を十分に熟知しなくてははいけません。そしてまた、同じ生徒をいろいろなレベルで教えることができなくてははいけない。かつ、さまざまなスキルを持って教えていく必要があるということです。私たちは教育者として何をしなくてははいけないのか。まず、子どもたちを一人ひとりの個々人として見るということから始めなくてははいけません。そのためには、子どもたちの目から見て、自閉症児の目から見て、世界はどんなふうに見えるのだろうかということを考えてみる必要があります。もちろん私たちは、この自閉症であるがゆえに子どもたちが

持っているさまざまな欠陥を埋めていくことはできないかもしれません。治すということとはできないかもしれません。しかしながら、それを理解することによって、子どもたちにぴったりの教育プログラムを設計していくことはできるのではないのでしょうか。そして、子どもたちが社会の中でより多くの貢献をすることができるようにということで、子どもたちの機能上の支援を与えることができるのではないかと考えています。

以上です。ありがとうございました。(拍手)

